Osaka University Knowledge Archive

Title	イネッサ・ハシュバ（1938-1967）の『アブハジアの民俗楽器』（1967）におけるアブハズ・アディゲ語族の文化的同族性 ： ソ連期のグルジア・ナショナリズムと関連して
Author(s)	久岡, 加枝
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2015, 49, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61357
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

イネッサ・ハシュバ（1938-1967）の『アブハジアの民俗楽器』（1967）におけるアブハズ・アディゲ語族の文化的同族性

――ソ連期のグルジア・ナショナリズムと関連して――

久 岡　加 枝

キーワード：アブハジア／グルジア・ナショナリズム／ソ連／民俗音楽研究／少数民族の知識人

はじめに

本稿では、スフミ生まれのアブハズ人の民俗音楽学者イネッサ・ハシュバの研究『アブハジアの民俗楽器 Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty』（1967）を基に、グルジア文化の影響下にあった、黒海沿岸の自治共和国アブハジアの知識人の間で、自文化をめぐるいかなる表象が展開されてきたのか考察を試みたい。

作家の父ムシュニ（1903-1992）の下で、作曲家の姉メリ（1937-）と共に、アブハジアの知識人層の家庭で、幼少から音楽や文学に親しんだハシュバは、1960年にトビリシ大学文学部のコーカサス諸語の課程を修了した。その後、故郷の黒海沿岸の保養地スフミにあるD. グリア Gulia 記念言語学・文学・歴史学研究所に勤務する傍ら、アブハジアの民俗楽器の研究に従事した。1966年には、グルジア科学アカデミー付属のI. ジャヴァヒシュヴィリ Javakhishvili 記念・歴史学・考古学・民族学研究所の音楽学者V. グヴァハリア Gvakharia（1925-1991）の下で、アブハジアの民俗楽器に関する論文で博士号を取得している。しかしながら、音楽学者としての将来が期待され

た矢先、1967 年の 12 月 18 日に 29 歳の若さで急逝した。[1] 惜しくも、彼女の博士論文が書籍として刊行される 2 週間前のことであった。本稿ではハシュバの遺作となった 1967 年の研究から、ソ連期の民族・文化政策の影響下で、グルジア[2] のものと同族視されたアブハジアの音楽文化に、それとは異なるアブハズ・アディゲ語族の特徴を見出そうとした、少数民族の知識人の姿を明らかにしたい。

近年、アブハズ・アディゲ語族の音楽文化については、現地出身の音楽学者による研究が進展しつつある。とりわけその中で多数派を占めるアディゲ Adyghe 人の間の音楽文化をめぐっては、ロシア連邦内のアディゲ Adyghe 共和国出身の音楽学者ソコロヴァによって、民族アイデンティティと結びついた興味深い研究が発表されている。ソコロヴァは、アディゲ人の間で盛んな、アコーディオンと鳴子状の打楽器による舞踊音楽が、ロシア内のアディゲとカバルダ・バルカル Kabarda-Balkar 共和国の他、トルコなどに暮らす同胞を含めた民族共同体意識を高める上で重要な役割を果たしていることを指摘する。[3] ソコロヴァによると、ソ連期において、当時から自治共和国であった東部のカバルダ・バルカルに比べ、小さな行政単位の自治州であり、文化統制が緩く、「純粋」な民族の音楽文化が育まれてきた西部のアディゲ共和国では、北西コーカサスを中心とする民族・地域アイデンティティの形成が進みつつあるという。[4] しかしながら本稿で紹介するように、北西コーカサスでは、現在よく知られるアディゲ人の他、アブハズ人の間においても、民俗音楽を通じたアブハズ・アディゲ語族の文化的同族性が主張されてきた事実は、現在見過ごされつつある。本稿ではハシュバの 1967 年の著作から、20 世紀以降グルジアの影響下にあったアブハズ人の知識人の間で、アブハズ・アディゲ語族の文化アイデンティティをめぐる見解が民俗音楽の分析を通じていかに導き出されてきたのかを明らかにしたい。

本稿は次のような構成に基づく。具体的なハシュバの著作の分析に入る前に、本稿の前半部分では、ソ連時代にグルジア内の自治共和国として置かれたアブハジアの民俗音楽や舞踊の「グルジア化」をめぐる政策の状況に

ついて述べておきたい。特にソ連期にアブハジアの民俗音楽の文化的属性をめぐって、戦後のグルジアの音楽学者の間でいかなる見解が影響力を持ってきたのか、V. アホバゼ Akhobadze（1918-1971）の 1957 年の研究をもとに考察を進めたい。後半部分では、具体的な 1967 年のハシュバの著作の分析に入り、アブハジアの民衆の間に広まる撥弦楽器、気鳴楽器、体鳴楽器にアブハズ・アディゲ語族の文化的同族性が見いだされてきた状況を明らかにしたい。結論では、ハシュバのアブハジア音楽の研究が、1983 年のグルジアの音楽学者 N. マイスラゼ（1937-）のアブハジアの音楽の文化的属性をめぐる認識に与えた影響について分析し、改めてその意義について考察を加えたい。

1. ソ連期グルジアにおけるアブハジア文化の位置づけ

1-1. スターリン期グルジアの文化政策を通じたアブハジアの同化

8 世紀以降、レオン Leon1 世の統治下で、当時東グルジアを支配していたバグラト Bagrat 王家よりも強大な覇権を手にしたアブハジア王国は、[5] 11 世紀以降、バグラト家がアラブのとの戦いから解放され、南コーカサスにおいて勢力を拡大すると、その統治下に置かれることとなった。[6] その後の 19 世紀以降、アブハジアはグルジアと共にロシア帝国の統治下に置かれ、[7] ソ連期の 1932 年以降、グルジアに属する自治共和国として位置づけられた。[8]

特にソ連期以降、アブハズ語を話すアブハズ Abkhaz 人が暮らすこの地域には、グルジア系のメグレリ Megreli 人の入植が進み、後述するように、アブハズ人の間では、隣接するグルジア系集団の多声的な民謡の受容が進んだ。またメグレリ人の間においても、民謡や民俗舞踊などのアブハジアの文化の受容が進みつつあった。帝政期からソ連期にかけて活躍したメグレリ人の K. パチュコリア Pachkoria（1888-1957）や K. ゲゲチコリ Gegechkori（1886-1971）の合唱団では、葬送の儀礼歌「アザル Azar」などのアブハジアの民謡も歌われ、こうしたレパートリーは、1937 年にモスクワで開催されたグルジア芸術祭で、グルジア文化の一部として紹介された。[9] このよう

な背景には、当時、グルジア共産党第一書記だったL. ベリヤ Belia（1899-1953）による、アブハジアの中央執行委員会委員長のN. ラコバ Lakoba（1893-1936）の暗殺に象徴されるような、アブハジアをグルジアの一部とする同化政策の影響があった。一方で、このようなグルジア側の意図とは裏腹に、スフミに拠点を置くアブハジアの歌舞団では、アブハジア文化の独自性をアピールする動きもあった。この歌舞団では、アブハズ人の舞踊手 P. パンツラヤ Pantsulaia（1898-1938）によって、つま先立ちや旋回などの技巧的な脚部の動作に基づく民俗舞踊が披露され、グルジアにおいても人気を誇っていた。しかし彼は、1938 年に共和国の内務人民委員会によって突如、逮捕された。[10] 彼の逮捕・粛清の背景については不明な点が多いが、アブハジアのグルジアへの同化を進めたベリヤにとってアブハズ人の文化的独自性を主張する芸術家の存在は目障りだったのかもしれない。[11]

ソ連期におけるアブハジアのグルジアへの同化はまた、民族起源と結びついた歴史学の研究によっても補強された。シュニレールマン（2001）は、古代からアブハジアの領域において、カルトリ Kartli 人やメグレリ人やスヴァン Svan 人などのグルジア系の集団が暮らしていたとする S. ジャナシア Janashia（1900-1947）らのグルジアの歴史学者の見解が、アブハジアの同化政策を正当化してきたと主張する。[12] このような歴史学の傾向はまた、民俗音楽の研究においても反映された。

1-2. 戦後のグルジアの民俗音楽研究にみるアブハジア音楽の文化的帰属意識をめぐる見解

ソ連期のグルジアにおける民俗音楽の中心的な研究機関は、トビリシ音楽院と、科学アカデミー付属のジャヴァヒシュヴィリ記念・歴史学・考古学・民族学研究所であった。トビリシ音楽院では、Sh. アスラニシュヴィリ Aslanishvili（1896-1981）や G. チュヒクヴァゼ Chkhikvadze（1900-1986）、V. アホバゼなどのグルジア人男性の音楽学者によって、民族起源と結びついた多声的な民謡の研究が進められてきた。その一方で、歴史学・民族学

研究所では、1960 年代以降ハシュバを筆頭に、グルジア人の T. ママラゼ Mamaladze（1908-1972）や M. シラカゼ Shilakadze（1938-2010）、N. マイスラゼらの女性研究者を中心に、グルジアと北コーカサスの諸民族の音楽文化の比較研究が進められた。アブハジアの民俗音楽の収集や研究に関しては、戦前から 1920 年代以降にこの地に滞在したウクライナ出身の音楽学者 K. コヴァチ Kovach（1899-1939）[13] の他、トビリシ音楽院のチュヒクヴァゼによって着手され、戦後以降はグルジアのアホバゼによって進められた。革命前の 20 世紀初めから、現地の音楽学者によって民族性の探求と結びついた民俗音楽の研究が進展してきたグルジアとは異なり、アブハジアでは、現地の知識人による自らの文化的帰属を対外的に明らかにしようとする音楽研究は進んでいなかったといえる。[14] しかしながらスターリン批判を期に、ソ連の諸民族の間で民族主義的な感情が高揚していく中、アブハズ人の間においても、自らの文化的独自性を明らかにしようとする民俗音楽の研究がハシュバによって進められることとなった。 またこのような研究がアブハジアの知識人の間で進められた背景には、アブハジアの民俗音楽の要素を同化しようとする以下に見るようなグルジア側の音楽学者の見解も影響を与えていた。

トビリシ音楽院の民俗音楽学者アホバゼは、1957 年にグルジアの学術雑誌『ソヴィエト芸術 Sabchot‘a Khelovneba』の中に公開されたアブハジア音楽に関する研究の中で、グルジアとアブハジアの多声的な民謡における和声終止形進行の共通性について興味深い考察を残している。当時のグルジアの音楽研究において、特に民謡の終止部分における和声終止形は、民族文化の基層的特質を反映した要素としてみなされた。[15] そのためアホバゼは、アブハジア民謡の基層となる特質を明らかにする上で、その型に注目していたといえる。アホバゼは、グルジア全域の民謡において頻出する音階の第七音から第一音へ戻る低音部の終止の形が、アブハジア南部オチャンチラ Ochamchira 地方の 3 声部による合唱形式の民謡においてもみられることを指摘する。[16] また彼は、隣接するグルジア系集団の影響を比較的受けていな

い北部のグダウタ Gudauta 地方の 2 声部の合唱においては、音階の第四音から第一音へ戻るというグルジア民謡には一般的でない低音部の終止の形がみられることを指摘する。[17] アホバゼはアブハジア民謡の文化的帰属をめぐって 1957 年の論文の結論で次のように述べている。

> アブハジア民謡においては、歌の始まりの旋律に、ロシア民謡の痕跡が見られる場合もあるが、アブハジア民謡においては、グルジア民謡の影響が根付いて長く、その影響は、アブハジア民謡を新たな発展へと導いている。疑いも無く、アブハジアの民謡は、グルジアの多声合唱と同じ運命にある。それは、アブハジアとグルジアの幾世紀にも亘る密接な関係を考慮した場合、理解可能なことである。[18]

アブハジア民謡の文化的帰属性をめぐるアホバゼの見解は、ソ連崩壊後のロシアとのこの地域の帰属をめぐる対立を予期するものである。しかしながら以下に見るように、ハシュバはアブハジアとグルジアの音楽文化に同族性を見出すアホバゼ側の見解に異を唱える立場であった。

2. ハシュバの民俗音楽研究にみるアブハジアの文化的独自性

2-1. ハープ属の民俗楽器「アユマア Ayumaa」にみるアブハズ・アディゲ語族の音楽文化の古層性

1967 年に出版された『アブハジアの民俗楽器』の第一章で、ハシュバはアブハジアの撥弦楽器の起源について独自の考察を行っている。彼女は、周波数測定器を用い、ハープ属の撥弦楽器「アユマア」（資料Ⅰ）などの弦の音の高さを、厳密にヘルツ単位で表記している。こうした手法は、当時のトビリシ音

Web公開に際し、
図版は省略しました

（資料Ⅰ）アユマアを弾くアブハズ人の男性。I. Khashba, *Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty* (Sukhumi: Alashara, 1967), p. 214.

楽院の研究者の間においては定着しておらず、ハシュバは、アブハジアの民俗楽器の音の独自性を具体的に提示しようとしていたことが考えられる。

この楽器に類似するハープ属の楽器は、アブハズ人の他、イラン系のオセット Ossete 人やグルジア系のスヴァン人など、コーカサスの北部の民族集団に広まっている。例えば、オセット人の間に広まる民間伝承『ナルト Nart 叙事詩』には、狡猾なシルドン Syrdon に牛を盗まれたことによって怒り狂ったナルトの一族によって、釜茹でにされたシルドンの 12 人の息子たちの骨と皮から、オセット人の 12 弦のハープ「ファンディル Fandir」が生み出された逸話が登場する。[19] 前述したアホバゼの研究では、c, d, e, f, g, a, h, c, d, e, f, g, a, h のイオニア旋法の音階からなるアブハジアの 14 弦のハープ「アユマア」が、e, f, g, a, h, c, d, e, f の音階からなるフリギア旋法に基づく 9 弦のグルジア系のスヴァン人のハープ「チャンギ Changi」と一部共通した音列を持つことが明らかにされる。[20] 一方で、ハシュバによると、アブハジアの民謡が、c の音から始まるイオニア旋法に基づく音階で歌われることは珍しく、彼女は、アホバゼの説の信憑性を確かめるために、アユマアの弦の音高を新たに計測している。ハシュバによると、グダウタ地方のアユマアのある型は as, g, e, d, c, b, as, g, f, es, des, h, b, f という音列からなり、それぞれの弦が、80 から 2560 ヘルツの音域を持つという。[21] このような音列は、アホバゼが指摘するグルジアのスヴァン人の「チャンギ」とは異なっている。とりわけ彼女は、アブハズ人とチェルケス Cherkess 人などのアブハズ・アディゲ語族の音楽文化のコーカサスにおける太古からの土着性を証明する上で、ハープ属の「アユマア」の弦の数に注目している。ハシュバは、アユマアの 14 の弦の数が、古代の天体信仰に由来するものであると次にように述べている。

> 音楽の歴史において、シュメールやバビロニア、ギリシャや中国などの音楽的な思考が古代に発達していた多くの地域で、5 や 7 といった楽器の弦の数が、天体と結びつけられていたことは良く知られている。5

は、土星や木星、火星、水星や金星といった天体を意味し、7はこれらの天体の他、より古い起源を持つ月と太陽を意味する。[22)]

こうした説を基に、彼女は、古い天体を象徴する7の倍数である14の弦からなるアブハズ人のハープが、7と新しい天体を象徴する5の組み合わせである12の弦を持つオセット人のハープよりも古い起源を持つと主張する。[23)] ソ連期の歴史学において、イラン系のオセット人の民族起源をめぐっては、コーカサスへ北方から入ってきたスキタイ Skythai やサルマタイ Sarmatai などの集団の末裔であるという説も定着していた。そのためハシュバは、より古い天体を象徴する7の倍数である14の弦を持つアブハズ人や同じアブハズ・アディゲ語族のチェルケス人のハープが、オセット人の12弦のものよりも古く、土着の起源を持つ可能性を指摘している。[24)] このような主張は、やがて、アブハズ・アディゲ語族の音楽文化の太古の時代における同族性をめぐる主張へと展開されていく。

2-2. 羊飼いのフルートの起源をめぐって

1967年の著作の第二章で、ハシュバはアブハジアに広まる気鳴楽器について考察を行っている。とりわけ彼女は、「アチャルピン Acharpin」もしくは「アチャルパン Acharpan」（資料Ⅱ）[25)] と呼ばれる拭き口に息を当て空気を振動させることによって音を出すエア・リード型の羊飼いの縦笛に注目している。この楽器は、演奏中に口の自由な部分を駆使し、奏者自身が低い声を出すことによって旋律にドローン音を加えながら演奏する独自の奏法で知られる。ハシュバによると、同じような音の響きはアブハズ人の間で演奏される2声部による合唱形式の民謡においてもみられるという。[26)] 60センチほどの長

（資料Ⅱ）アチャルピンを吹くアブハズ人の男性。
V. Akhobadze, Abkhazskie Pesni (Moskva, 1957), p. 9.

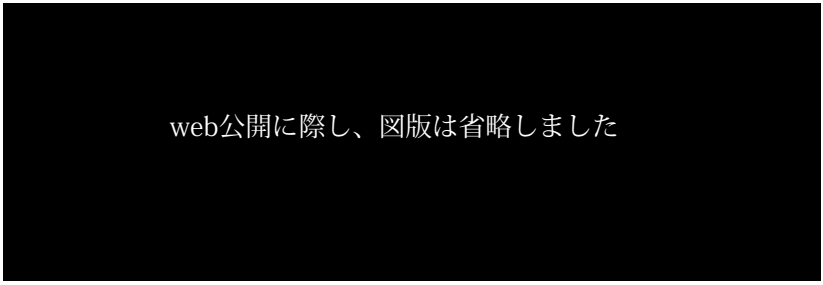
さのこの笛は、主に葦やハナウド属の植物の茎をくり抜いて作られ、表に3つ、裏に2つほどの穴が開けられており、2オクターブほどの音域を持つ。

ハシュバによると、アブハジアの山岳部の羊飼いの間でこの笛は、家畜の多産を祈願する場合や、羊飼い自身が病に伏した時に回復を祈って演奏され、呪術的な楽器として位置づけられてきたようである。[27] ハシュバによると、前述の『ナルト叙事詩』には、ナルトの一族の一人であるキャタヴァンKyatavanが、迷える羊たちの群れに遭遇した際に、羊たちがどこからともなく聴こえてきたアチャルピンの音色に導かれていったことから、アブハズ人の間にこの楽器が定着したエピソードが登場するようである。[28] 豊穣の母神サタナSatanaによって生み出されたナルトと呼ばれる一族をテーマとするこの叙事詩は、オセット人を中心に、アブハズ人、チェルケス人などの北西コーカサスの民族集団に広まる。このような民俗楽器と『ナルト叙事詩』との関連性への言及からも明らかなように、ハシュバは北西コーカサスの文化をグルジアのものと明確に区分しようとしていたといえる。また ハシュバは、アチャルピンのようなエア・リード型の管楽器の誕生をめぐる逸話が、エジプトやギリシャ、中国などの民間伝承において登場することについても言及しているが、こうした葦笛が、単一の起源を持つものでは無く、古代の各々の地域で、独自に生み出されてきた可能性を指摘している。[29] 彼女が羊飼いの笛の起源を同時発生的なものと考えた理由として、当時のグルジアではトビリシ音楽院の音楽学者チュヒクヴァゼによって、トビリシ近郊の古都ムツヘタで1930年代に発見された、紀元前10世紀前後のものとされる羊飼いの笛「サラムリSalamuri」とアチャルピンの類似性が指摘されたことも考えられる。[30] ハシュバは、このようなグルジア側の羊飼いの笛の起源をめぐる見解に批判的だったのかもしれない。羊飼いの笛の世界各地での同時発生的起源をより強く主張した彼女は、アチャルピンにアブハズ・アディゲ語族に固有の文化的特徴を見出さなかった。しかしながらハシュバは、以下に見るように、楽器分類学において最古の起源を持つとされる体鳴楽器に関して、アブハズ・アディゲ語族の太古からの文化的同族性を示す興味深い考察

を残している。

2-3. 鳴子状の打楽器にみるアブハズ・アディゲ語族の太古からの同族性

1967 年の著作の第三章で、ハシュバはアブハジアやアディゲなどの北西コーカサス地域を中心に広まる打楽器の共通性について考察を行っている。彼女はここで、K. ザックス Sachs（1881-1959）の楽器分類法を基に、打楽器が、気鳴楽器や撥弦ないし擦弦楽器よりも古い起源を持つことを強調しており、ロシア語で「トレショートカ Treshchotka」（資料Ⅲ）と呼ばれる複数枚の板を張り合わせた鳴子状の体鳴楽器に、北西コーカサスの打楽器の祖型を見出している。[31)]

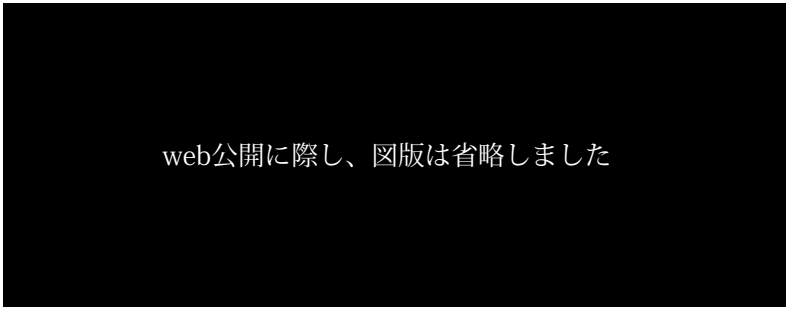


（資料Ⅲ）トレショートカ。左はアブハズ人のもので、右はチェルケス人の間に広まっているもの。Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty (Sukhumi, 1967), p. 227.

この楽器は、アブハズ人の他、チェルケス人の間で結婚式などの祝祭日で用いられるほか、日常的な舞踊の音楽の伴奏に用いられるものである。[32)] また、ハシュバによると 1960 年代のアブハジアの農村部の子どもの間では、トウモロコシの茎で作られたものが、玩具としても広まっていたようである。[33)] 彼女は民俗楽器について、とりわけ古い起源を持つとされる打楽器の北西コーカサスにおける分布を例に、この章の最後を次のように締めくくっている。

アブハズ人の楽器と、それに類似するアディゲ語族の楽器との比較研究は、それらの外形的、機能的な類似性を明らかにし、これらの民族集団の同一の起源を確証させるものである。このようなアブハズとアディゲ語族の楽器の類似性は、彼らが分化する以前の祖型となる集団が、太古の昔に発生起源を持つことを示唆するものである。現在まで彼らが古代の記憶として保持してきた楽器の類似性は、こうした事実を裏付けるものである。[34)]

ハシュバはこの章を締めくくった後、付録部分で、アブハズ人をはじめとする北西コーカサスのアブハズ・アディゲ語族のアディゲ人、チェルケス人、カバルダ人の他、テュルク諸語のカラチャイ Karachay 人やバルカル Balkar 人、印欧語族のオセット人の間に広まる弦楽器や気鳴楽器、体鳴楽器の共通性を明らかにしている。巻末の彼女の考察からは、アブハズ・アディゲ語族を基盤とする汎コーカサス的な音楽文化の特徴を考察しようとする試みも伺える。[35)]



（資料Ⅳ）北コーカサスに広まるフィドル属の民俗楽器。左はアディゲの「シチェプシヌイ Shichepshiny」。中央はカバルダ・バルカルの「プシナ Pshina」とチェルケス人の「コブズ Kobuz」、右はアブハジアの「アプヒァルツァ」。
Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty (Sukhumi, 1967), p.204, 212.

おわりに

アブハズ人の民俗音楽学者 I. ハシュバによる『アブハジアの民俗楽器』（1967）からは、現存する様々なタイプの民俗楽器の比較考察を通じて、アブハズ・アディゲ語族の文化的同族性を明らかにしようとした民族知識人の姿が明らかとなった。ハシュバが残した研究は、その後のグルジアの音楽研究の動向に影響を与えたといえる。彼女の同僚だったグルジア人の音楽学者マイスラゼが 1983 年に発表した研究では、アブハジアの 2 声部の合唱形式の民謡に見られる 4 度音程の連続からなる和声終止形の特徴や、音階の第 7 音から 6 音、第 1 音へ戻る低音部の跳躍的な進行が、アディゲ語族の民謡においても見られることが指摘される。[36] マイスラゼは、アブハジアの民謡が、フリギア旋法に基づく和声終止形など、グルジア東部の民謡との類似性を持つ一方で、前述した和声や和声終止形の進行から見た場合、アディゲ語族の民謡に極めて近いものであることを指摘している。[37] こうした、アブハズ・アディゲ語族の音楽文化の同族性をめぐる見解は、アホバゼなどの 1950 年代のグルジアの研究者の間においては見られなかったものである。グルジアの音楽学者は、ハシュバの残した研究の薫染を受けたといえる。

謝辞
本稿の執筆に当たって、貴重なハシュバの著作を提供してくださった宮城教育大学名誉教授の森田稔氏と、ハシュバの生前の同僚であり、ソ連期のグルジアの音楽研究の動向についてご教授いただいたグルジア科学アカデミー付属 I. Javakhishvili 記念・歴史学・考古学・民族学研究所の N. マイスラゼ氏に感謝の意を表したい。

［注］

1） 彼女の同僚の音楽学者 N. マイスラゼ Maisuradze（1937-）によると、扁桃腺の手術の経過が思わしくなく、合併症で心臓を患ったことが死亡の原因だったようである。

2）　ソ連時代を扱う本稿においては、ロシア語読みの民族・地域名称を用いる。

3）　A.Sokolova, “Destructive, Constructive and Reconstructive Processes in the Traditional Instrumental Music of the Adyghes durting the Soviet and Post-Soviet times,” in Tsitsishvili ed., *Cultural Paradigms and Political Change in the Caucasus* (Saarbrücken: Lambert, 2010), pp. 110-129.

4）　Ibid., pp. 112-113, 122.
ソコロヴァによると、現在のアディゲ共和国の音楽家の間では、トルコなどの同胞の音楽の他、アブハジアやチェチェンなどの民族の音楽も演奏される。

5）　R. G. Sunny, *The Making of Georgian Nation: Second Edition* (Indiana: Indiana University Press,1994), p. 29.

6）　Ibid., p. 33.

7）　Ibid., p. 64.

8）　Ibid., p. 321.

9）　A. Erkomaishvili, *Georgian Phonogram Recordings Abroad* (Tbilisi: The International Center for Georgian Folk Song, 2007), p. 177.
これらの合唱団の 1930 年代の演奏の録音は、モスクワのロシア国立録音アーカイヴ（http://www.rusarchives.ru/federal/rgafd/）に保管される。

10）　T. Kipiani, M. Imesashvili, “Platpon P‘ants‘ulaia,” in Rodonaia, ed., *K‘art‘uli khalkhuri simgherebis ostatebi, Samegrelo vol. 2* (Tbilisi: Sak‘art‘velos Mats‘ne, 2007), p. 241.
同書によると、パンツラヤの粛清後、アブハジアの歌舞団の運営はメグレリ人のゲゲチコリに引き継がれた（2007, p. 156.）。

11）　グルジア内務省（http://police.ge/en/home）のアーカイヴに保管される 1938 年 4 月 28 日にグルジア共和国内務人民委員部が作成した議事録（no.110）では、パンツラヤの逮捕の理由として、スターリンの側近の政治家 S. キーロフ（1886-1934）の暗殺を目的とした反ボリシェビキ的な組織での活動や、ラコバとの結びつきが指摘された。

12）　V. Shnirelman, *The Value of the Past: Myths, Identity and Politics in Transcaucasia,* Senri Ethnological Studies No.57 (Osaka: National Museum of Ethnology, 2001), p. 237.

13）　K. Kovach, *Abkhazskaya narodnaya pesnya: etnograficheskaya zapis’ istoricheskimi spravkami.* (Sukhumi: Narkomprosa Abkhazii i akademii Abkhazskogo yazyka i literatury, 1929)

14）　1950 年代には下記のアブハズ人による、アブハジア民謡のテクストやジャンルに関する興味深い研究も発表された。しかしハシュバの研究とは異なり、アブハズ・アディゲ語族の太古からの文化的同族性を強調するものではなかった。
B. Shinkuba, “Ap‘khazuri khalkhuri simgherebis shesakheb,” *Ap‘khazet‘is enis literaturisa da istoriis institutis shromebi,* no.24 (1951), pp. 99-124.

15）　Sh. Aslanishvili, *Narkvevebi k‘art‘uli khalkhuri simgherebis shesakheb* (Tbilisi: Sak‘art

‘velos t‘eatraluri sazogadoeba, 1954), pp. 122-128.

16） V. Akhobadze, “Ap‘khazuri khalkhuri musikis shesakheb,” *Sabchot‘a Khelovneba,* no.2-3 (1957), p. 116.
Akhobadze, Abkhazskie Pesni (Moskva: Gosudarstvennoe muzykal’noe izdatel’stvo, 1957), p. 11.

17） Akhobadze, “Ap‘khazuri khalkhuri musikis shesakheb,” *Sabchot‘a Khelovneba* (1957), p. 116.
Akhobadze, Abkhazskie Pesni (1957), p. 11.
興味深いことにアホバゼは、『ソヴィエト芸術』の論文の中で、アブハジアの挽歌「アザル」の名称が、隣接するグルジアのスヴァネティ地方の挽歌「ザリ Zari」に由来する新しいものであり、古代のアブハジアにおいて挽歌アザルの別の名称が存在した可能性を指摘する（1957, p. 117）。

18） Akhobadze, “Ap‘khazuri khalkhuri musikis shesakheb,” *Sabchot‘a Khelovneba* (1957), p. 117.
また、アホバゼはアブハジアの2声の合唱について、グルジア系集団のみならず、オセット人などの類似する合唱の形式を持った北コーカサス諸民族の音楽と比較考察する必要があると述べている。アホバゼは、アブハジア民謡の汎コーカサス的な性格を強調しようとしたのかもしれない。しかしその文化的同族性の中心は、57年の論文の結論からも明らかなようにグルジアにあったといえる。

19） M. Tskhuyrbaty, *Narta* (Tskhinvali: Iryston, 1988), pp. 190-196.

20） V. Akhobadze, Abkhazskie Pesni (Moskva: Gosudarstvennoe muzykal’noe izdatel’stvo, (1957), p. 10.

21） I. Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal’nye instrumenty (Sukhumi: Alashara, 1967), pp. 56-69.
この章では他に、擦弦楽器「アプヒァルツァ Apkh’artsa」、打弦楽器「アヒマア Akhymaa」についても言及する。これらの楽器の同型はグルジアにもみられる。

22） Ibid., p. 72.

23） Ibid.

24） Ibid., p. 74.

25） コヴァチによると、アブハズ語でこの笛の材料となる植物を意味するという。Kovach (1929), p. 11.

26） Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal’nye instrumenty (1967), p. 85.

27） Ibid., p. 104.

28） Ibid., p. 106.

29） Ibid.

30） N. Nakashidze, “First English Translation of Essays on Georgian Folk Music,” *IRCTP*

Bulletin, no.1 (2004), p. 12.

31） Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty (1967), p. 107.

32） アディゲ共和国では、「プハツィツィ Pkhachich」と呼ばれ、アコーディオン「ガルモーニ Garmoni」と共に舞踊音楽の伴奏に用いられる。
A. Sokolova, "Destructive, Constructive and Reconstructive Processes in the Traditional Instrumental Music of the Adyghes durting the Soviet and Post-Soviet times," (2010), p. 123.

33） Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty (1967), pp. 110-111.
また、その音から、「アグィルグィン Agyrgyn」と呼ばれる胡桃に糸を通した打楽器もアブハジアの子どもの間のみならず、メグレリ人の子どもの間で「Gum-Kval」（トウモロコシ粥とチーズを意味する単語でハシュバによるとこの楽器の音に由来する）と呼ばれ、玩具として広まっていたようである。ハシュバはこれらの楽器を打楽器の中で特に「プリミティヴ」な存在として位置づけている。

34） Ibid., 112.

35） Ibid., pp. 191-229.
北コーカサスに広まる2から3弦のフィドル属の民俗楽器、アディゲの「シチェプシヌイ Shichepshiny」、カバルダ・バルカルの「プシナ Pshina」、チェルケス人の「コブズ Kobuz」、アブハジアの「アプヒァルツァ Apikh'artsa」などについて言及している。
Khashba, Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty (Sukhumi, 1967), p. 204, 212.

36） N. Maisuradze, *Probremy genezisa stanovleniya i razvitiya Gruzinskoi narodnoi muzyki* (Tbilisi: Akademiya nauk Gruzinskoi SSR, Institut istorii, arkheologii i etnografii imena. I. Javakhishvili, 1983), pp. 29-30.
マイスラゼは、アブハジアの民謡にエオリア、フリギア、ドリア、リディア、ミクソリディア、イオニアなどの旋法に基づく旋律が頻出することを指摘し、イントネーションから見た場合、アディゲの他、東グルジア山岳地域の民謡 との近縁関係を見出すことが可能だと述べている。また彼女は、アブハジアの民謡の和声が、より新しい時代に、近隣のメグレリ人やスヴァン人などのグルジア系集団の影響を受けた可能性を指摘する。なお、この論文は後に出版された以下のマイスラゼの著作の中に収録された。N. Maisuradze, *Drevneishie etapy razvitiya Gruzinskoi narodnoi muzyki* (Tbilisi: Metsniereba, 1990), pp. 141-149.

37） Maisuradze (1983), p. 28, 31.

［参考文献］

Akhobadze, V. 1957. *Abkhazskie Pesni.* Moskva: Gosudarstvennoe muzykal'noe izdatel'stvo.

Akhobadze, V. 1957. "Ap'khazuri khalkhuri musikis shesakheb," *Sabchot'a Khelovneba,* no.2-3, pp. 114-117.

Aslanishvili, Sh. 1954. *Narkvevebi k'art'uli khalkhuri simgherebis shesakheb*. Tbilisi: Sak'art 'velos t'eatraluri sazogadoeba.

Erkomaishvili, A. 2007. *Georgian Phonogram Recordings Abroad.* Tbilisi: The International Center for Georgian Folk Song.

Khashba, I. 1967. *Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty*. Sukhumi: Alashara.

Kipiani, T., Imesashvili, M. 2007. "Platpon P'ants'ulaia," in Rodonaia, ed., *K'art'uli khalkhuri simgherebis ostatebi, Samegrelo vol. 2*. Tbilisi: Sak'art'velos Mats'ne, pp. 239-244.

Kovach, K. 1929. *Abkhazskaya narodnaya pesnya: etnograficheskaya zapis' istoricheskimi spravkami.* Sukhumi: Narkomprosa Abkhazii i akademii Abkhazskogo yazyka i literatury.

Maisuradze, N. 1983. *Probremy genezisa stanovleniya i razvitiya Gruzinskoi narodnoi muzyki.* Tbilisi: Akademiya nauk Gruzinskoi SSR, Institut istorii, arkheologii i etnografii imena. I. Javakhishvili.

Maisuradze, N. 1990. *Drevneishie etapy razvitiya Gruzinskoi narodnoi muzyki*. Tbilisi: Metsniereba.

Nakashidze, N. 2004. "First English Translation of Essays on Georgian Folk Music," IRCTP Bulletin, no.1, pp. 11-12.

Shinkuba, B. 1951. "Ap'khazuri khalkhuri simgherebis shesakheb," Ap'khazet'is enis literaturisa da istoriis institutis shromebi, no.24, pp. 99-124.

Shnirelman, V. 2001.*The Value of the Past: Myths, Identity and Politics in Transcaucasia,* Senri Ethnological Studies No.57. Osaka: National Museum of Ethnology.

Sokolova, A. 2010. "Destructive, Constructive and Reconstructive Processes in the Traditional Instrumental Music of the Adyghes durting the Soviet and Post-Soviet times," in Tsitsishvili, N ed., *Cultural Paradigms and Political Change in the Caucasus.* Saarbrücken: Lambert, pp. 110-129.

Sunny, R. G. 1994. *The Making of Georgian Nation: Second Edition*. Indiana: Indiana University Press.

Tskhuyrbaty, M. 1988. *Narta.* Tskhinvali: Iryston.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Cultural Homogeneity of Abkhazo-Adyghean People in *Abkhazian Folk Musical Instruments* (1967) by Inessa Khashba (1938-1967): Concerning Georgian Nationalism during the Soviet Period

Kae Hisaoka

Key words: Abkhazia, Georgian nationalism, Soviet, folk music studies, minority intellectual

Inessa Khashba, an Abkhazian female musicologist and ethnographer, was born in Sukhumi. After graduating from the Department of Caucasian Languages at Tbilisi State University, she began working at the Institute of Language, Literature, and History in Sukhumi, while also studying Abkhazian folk musical instruments. In 1966, she completed a doctoral degree in Abkhazian folk musical instruments at the I. Javakhishvili Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Georgian Academy of Sciences. However, just a few weeks ago when her book *Abkhazskie narodnye muzykal'nye instrumenty*, based on her doctoral thesis, was published, she suddenly died. In this book, she attempted to seek the cultural homogeneity of the Abkhazo-Adyghean people, under the influence of the Georgian ethnic-cultural policy during the Soviet period, which intended to assimilate the Abkhazians into Georgian culture. In the first section of this paper, I explain what opinions about the cultural attributes of Abkhazian folk musical culture dominated among Georgian folk music studies. In the second section, drawing on Khashba's (1967) study of Abkhazian folk instruments, I consider how cultural homogeneity among Abkhazo-Adyghean people was found in the string, aerophone, and idiophone instruments of Abkhazia. In conclusion, I discuss how Khashba's study influenced the recognition of the cultural attributes of Abkhazian folk music among Georgian researchers, after her death.